

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 29 年度
氏名	大高 健	指導教員 (主査)	小池 眞規子

論文題目	シャイネスにおける社会的スキルおよび関連要因の検討
------	---------------------------

本文概要

【問題と目的】現代社会において、青年期の対人場面におけるコミュニケーションが問題となっている。Edelmann(1987)では、アイデンティティを確立する時期でもある青年期は、ほとんどの者が対人不安を感じるとも述べている。このような対人不安に関する概念としてシャイネス(Shyness)がある。シャイネスは日本に特有の心理的障害とされる対人恐怖との関連でも注目されている(後藤, 2001)。これまでのシャイネス改善・治療は、訓練によって社会的スキルの欠如を解消することを目的に進められてきた(後藤, 2001)。社会的スキルについて渡辺・合田(2015)では、「親和傾向」「拒否不安」「学習意欲」が「スキル実行」にかかわると述べられている。これらのことからシャイネスを持つ人は、社会的スキルは獲得しているが、スキル実行が欠如している可能性が考えられる。そこで本研究は、シャイネスおよび対人恐怖傾向の程度が、どの社会的スキルに影響を及ぼしているのかを探索的に検討することを目的とする。

【研究方法】対象大学生 310 名に質問紙調査を実施し、回答に不備のあったものを除いた 296 名(男性 97 名, 女性 199 名, 平均年齢 19.78 歳, SD=1.37)を分析の対象とした。**【使用尺度】**①フェイスシート(性別, 学年, 年齢), ②特性シャイネス尺度(相川, 1991), ③対人恐怖の傾向尺度(相澤, 2009), ④親和動機尺度(杉浦, 2000), ⑤アパシー傾向測定尺度(箭本・鈴木, 2017), ⑥成人用ソーシャルスキル自己評定尺度(相川・藤田, 2005)

【結果と考察】シャイネス・対人恐怖のパターンと社会的スキル関連要因の検討特性シャイネス尺度と対人恐怖の傾向尺度を用いてクラスター分析を行い、4つのクラスターに分類した。そして、4つのクラスターによって「親和傾向」「拒否不安」「アパシー」を従属変数とする1要因の分散分析を行った。その結果、シャイネスと対人恐怖がどちらも低いと親和傾向が高いことが示された。さらに、シャイネスが高く対人恐怖が低い場合よりも、シャイネスが低く対人恐怖が高いほうが親和傾向は高かった。このことから、対人場면을恐れる傾向の強い人よりも人前や人との関わりで恥ずかしい気持ちの強い傾向の人のほうが他者と親しくなりたいという欲求は低いことが推察された。さらに、シャイネスと対人恐怖がどちらも高い場合や、シャイネスが低く対人恐怖が高いほうが拒否不安は高いことが示された。このことから、シャイネスと対人恐怖が人から拒否されることへの不安感と関連があるが、対人恐怖が高い人のほうがその傾向は強いことが明らかとなった。**シャイネス・対人恐怖のパターンと各社会的スキルの検討**4つのクラスターによって各社会的スキルを従属変数とする1要因の分散分析を行った。「親和傾向」はシャイネスと負の相関がみられた。また、「関係開始」の差について、シャイネスが高く対人恐怖が低い群とどちらも高い群が関係開始のスキルが低いことが示された。つまり、初対面で恥ずかしい気持ちを強く感じた際にうまく対処することができないことが考えられる。「関係維持」の差について、シャイネスと対人恐怖がどちらも高い群、シャイネスが高く対人恐怖が低い群が関係維持のスキルが低いことが示された。このことから、人から拒まれることへの不安だけでなく、シャイで対人恐怖も伴うことが関係を維持していく上では問題になってくることが考えられる。

【主要な参考文献】

福田 正人・寺崎 正治 (2012). シャイネスが日常活動および主観的幸福感に及ぼす影響 川崎医療福祉学会誌, 21(2), 226-233.